

## マスコミの“風”に流されないで！

「一つの妖怪が歩き回っている——共産主義という妖怪が」・・・昔、学生時代のある教授の講義でよく聞いたものだった。当時、社会に浸透しようとしていた共産主義の危険性を示した言葉として、よく論文や演説の冒頭に引用されたものだ。

私も現今の社会状況を見るにつけ、この表現を借用し次のような言葉を作り出したい。あまりキレはよくないけれど・・・



「一つの風が吹きまくっている——“政権交代”という民主党への追い風が」・・・台風の季節はまだだというのに、この大風は選挙民の心の中まで吹き及んでいる。マスコミが作った妖怪、(いや“幽霊”の方が妥当かな？根拠となる「足」がないんだから)のような風である。問題は、有権者が自分の目で各党の政策、これまでの実績、マニフェストの内容等を吟味することなく、マスコミが作ったこの風に一方的に乗せられていることだ。

衆議院選挙が迫り各党がマニフェストを発表、マスコミの論議もにぎやかになってきた。そこで有権者は、社会の木鐸であるべきマスコミが、その論議・分析に公平を欠いていないか、初めから特定政党への肩入れをしていないかを見破らなければならない。

今、メディアの相当数が「一度、民主党に」との流れを作っているように見える。同党の有名人候補が出る激戦選挙区では、その経歴や運動ぶりを面白おかしく取り上げている。結果的にますますその候補の知名度を上げているわけだ。先の都議選でも見られたが、そこでは政治家としての資質などは掘り下げることなく、美人度や人気投票的な角度で取り上げていた。これは有権者の軽薄な判断へとつながりかねない。日本の将来にきわめて憂慮すべき危険な風潮だ。「選挙民は自分のレベルに合った政治家しか持てない」とはよく言われてきたものだが、結果的に苦しむのはそういう政治家を選んだ選挙民自身である。

世論調査によれば相当数の国民が「政権交代」を望んでいる、という。でも、これもよく見極めないと、調査の仕方そのものが、初めからある方向性を狙って質問を作っているケースもある。でも、それが「世論」として喧伝される。“マスコミが作った風”に吹き流された世論ほど危ないものはない。こうした状況下で今回、少数政党が埋没しようとしているが、歴史的に彼らの果たしてきたものも大きい。例えば、大企業寄りの政策を進めていた自民党に対して、政権与党の一部として、大衆福祉と庶民の生活を守る視点から政策を立案、市民の生活に反映してきたのは公明党である。実際、果たして二大政党制が日本に合っているかどうかこれから検証していかなければならないだろう。私は少数政党の果たす役割にも大いに期待している。

